

職員による自己評価

A環境面

スタッフ配置は適切ではないと考えている。
バリアフリー化はどちらともいえない

B児童への支援内容

必ず、打ち合わせ・振り返りは行えている。
個別活動と集団活動を適宜組み合わせている
かは、半分くらいの出来。
ガイドラインについては知識がない

C関係機関との連携

相談支援事業所以外の関係機関との連携は不足している。

D保護者への説明責任・信頼関係

運営規定・支援内容・利用者負担などについての説明は改善の余地がある。

E非常対応

非常災害に対する訓練は履行されている
各マニュアルの周知徹底は改善の余地あり
身体拘束についての取り扱いを改善すべき

保護者による評価

A環境面

バリアフリー化はさほど問題ではない

B児童への支援内容

プログラムと計画については、満足
交流はあまり求めている

C事業所からの情報発信

父母会や保護者同士の連携はないが、コロナの影響もある。

個人情報には配慮されていると保護者は考えている

情報が足りないという顕著な意見はない

D非常対応

訓練実施に関する情報が保護者に伝わっていないことがある

事業所内での分析

【共通点】

バリアフリー化に関しては、双方さほど問題視していない
プログラムについては、スタッフは工夫していると感じ、保護者は概ね満足している。

【相違点】

スタッフは災害訓練を行った意識が高いが、結果が保護者に周知されていない。
各マニュアルに対して周知徹底がもっと必要だとスタッフは考えるが、保護者の意見としては概ね分かっていると考えている

分析・検討してみても…

事業所の強み

- ・プログラムの工夫があり、保護者も満足度が高い。
- ・日頃から子供の状況を保護者と伝えあい、個別の配慮や発達の理解を、共通意識を持って深めている。
- ・療育を行うことの責任感が強く、お子様に対する安全配慮義務に対する意識が持っている。

事業所の改善点

- ・マニュアルの周知徹底に関しては保護者からは、甘めの評価を頂いたが、スタッフは改善の余地があると思っている。
- ・身体拘束に関する取り扱いを定期的に勉強する機会を持ち、支援計画への記載や記録を取ることを徹底する。
- ・昨年と似通った項目で改善すべき点が指摘された。

事業所の改善への取り組み

- ・ガイドラインを解説とともに意味を理解しながら知る機会を作っていく。
- ・関係機関との連携・会議の場面、事業説明などの場面に様々なスタッフが出向き、実地で学ぶ機会を作る。
- ・ミーティングの際に、個別支援計画の申し送りと個別支援会議の機会を十分に作る。
- ・スタッフが個々で問題を抱え込まずに、お互いに支え合うことで共通の問題意識を持てるのではないか。

～自己評価を行っての事業所としての感想など～

数字では表せないような、それぞれの問題意識を共有する場（ミーティングが）が持てて良かった。普段は日々の業務に追われていることが多く、一つ一つの業務の達成度について客観的に評価する機会を持っていないので、良い機会となった。スタッフの向上心が高く、福祉の制度や専門知識などに関して学ぶ意欲を感じたので、チームとして共に高め合っていると良い。